



雨季のナイル川（撮影：橋本栄莉）

第 25 回高島賞受賞によせて

橋本栄莉（立教大学）

この度、拙著『エ・クウォス：南スーダン、ヌエル社会における予言と受難の民族誌』（九州大学出版会、2018年）に第25回高島賞が授与されましたこと、心より嬉しく思います。同時に、賞の選定に携わってくださった先生方、日本ナイル・エチオピア学会の会員の皆様、そして私の研究に関わったすべての皆様に深い感謝の念をお伝えしたいと思います。

書籍のタイトルである「エ・クウォス」とは、ヌエル語で「それはクウォスである」という意味です。クウォスとは、神とも精霊とも翻訳可能な概念です。この本では、激動の時代を生き抜いたヌエルの人々が、しばしば「予言が成就した」という意味合いで使用するこの表現と、これに付随する経験を描き出すことを試みました。

私をこの研究へといざなったのは、2008年12月、南部スーダン（現南スーダン共和国）のナイル川のほとりで語られた、ある予言者をめぐる2つの解釈でした。この予言者とは、『エ・クウォス』の主役の一人でもある、20世紀初頭に存在したングンデン・ボンという人物です。

目次

- ▶ 第25回高島賞受賞によせて
- ▶ 第25回高島賞選考結果講評
- ▶ 第28回学術大会最優秀発表賞受賞によせて
- ▶ フィールド通信
- ▶ 新刊ライブラリー
小馬徹著『ケニアのストリート言語、シェン語』
飛内悠子著『未来に帰る』
- ▶ 現地／渡航情報
ケニア

当時、私はナイル川のほとりにあるホテルに宿泊していました。そこは夜な夜な若者たちが集まり、酒を飲み、ダンスを踊るクラブ兼バーでもありました。それまで外国に行ったことも、調査をしたこともなかった私は、本当に手当たり次第に、誰彼構わず、ヌエルの予言者のことを聞いてまわりました。当たり前のことですが、ダンスを踊り、異性を口説き、愛を語り合う場でそんなことを聞いて回っても、ほとんど相手にされませんでした。

そんな場所で偶然出会ったのが、予言を熱心に語る、ヌエルの若者たちでした。ヌエルは、ナイル川流域に暮らすナイル系農牧民ですが、現在では多くのヌエル人が都市部にも居住しています。クラブにやってきた若者たちは、これは大事な話だから、次の日酒が抜けてから予言の話をもっとしてやると言い、その夜は去っていきました。

翌日の昼過ぎ、彼らは前日とはうってかわって、仕事に行くようなびしとした恰好で私の前に現れました。実際、彼らは仕事で、昼休みの間に来てくれたようでした。聞けば、彼らは政府高官とともに仕事をしているということです。その中の一人はアメリカで修士号を取得しているいわば「超エリート」でした。そんな彼らが教えてくれたのは、ングンデンの予言の詳細と、それが今現在起こっていることといかにか合致しているのかということでした。それまで、予言とは村落部の年配者が信じているであろうものだと勝手に考えていた私にとって、エリートである彼らが目を爛々とさせながら熱心にングンデンの予言の正しさを語っている姿は、大変印象的でした。彼らが語った予言とは、ヌエル出身の大統領誕生の予言でした。この話を聞いて、私は、これまで過去のものでしかないと思っていた予言が、実はむしろ現在、そして未来の問題としてこの地には存在しているということを知りました。

興奮冷めやらぬまま、私は迷惑なことに、仕事のホテルの従業員たちにこの話をしてまわりました。ウガンダから出稼ぎに来ていたスタッフは、「そういう話は聞いたことがある」とそっけなく言い、あとは南スーダン人のホテルのオーナーに聞けと言いました。

ホテルのオーナーは、ディンカ人でした。ディンカはヌエルに隣接するナイル系農牧民ですが、過去の内戦時、ヌエルとの間で凄惨な「民族紛争」を経験しました。当時の私は、あまりにも無知でした。ヌエルとディンカがこれまで築いてきた関係についてまるで把握しておらず、何のためらいもなく、ヌエルの予言者の話をディンカのオーナーに聞いたのです。オーナーは、大変親切に、次のように話してくれました。

「確かにその予言者は存在していたし、その人物はヌエルだけじゃなくて、南スーダンの予言者だと言っていいだろうね。自分もその人物は知っているけど、詳しくはヌエルの人に聞いた方がいいんじゃないかな。」

少し間をおいて、彼はナイル川の向こうを見つめながら、ぼそりとつぶやきました。

「たしかにその予言者は正しいのかもしれない。でも、大勢を殺すことの予言なんて正しいわけがない。」

1991年、ヌエル出身の司令官率いる兵士たちによって、多くのディンカ市民が「虐殺」されました。彼は、この時のことを言っていたのでしょう。たしかに、このときのヌエルによるディンカの「虐殺」のこともングンデンによって予言されていたという話はその後の調査で何度か耳にしました。



ウシの供犠のあと、皮についた肉をそぎ落とす子どもたち

私が今でも思い出すのは、このときの二人の対照的な目です。たしかな未来を語るヌエル人エリートの爛々と輝く目。そして、過去の虐殺の記憶をたどるかのような、ディンカ人オーナーの遠い目。

『エ・クウォス』は出版され、このように大変ありがたい賞をいただくことができました。一方で、私が自身に問うのは、ナイル川のほとりでのこの経験と、彼らが語った経験を、果たしてこの本で描き切ることができたのだろうか、ということです。この時の出会いと彼らの語った予言について、分析し、結論をつけることは、本が出版された今でも難しいことだと感じています。

ただ、言えることは、予言は今もなお、人々の経験を——そして時には現実を——構築しているということです。私が『エ・クウォス』で描いたのは、この構築途上の経験の一側面に過ぎません。人々は、現在はまた別の「エ・クウォス」について語っていることでしょう。この、語られては消え、消えてはまた語り直されながら人間の生を紡いでゆくクウォスのありかたについては、今後も課題として探求していかなければなりません。

もう一つの課題は、クウォス kuoth をはじめ、デン deng、ティエブ tiep、ニアル nhial などの神性と、隣接するナイル系の諸民族の神性概念との関連を検討することです。『エ・クウォス』でも論じたように、神性は、単なる抽象的な思念として人々の精神に宿っているのではなく、ある具体的な経験の痕跡としてその地にあります。

特にこの二つ目の課題は、日本ナイル・エチオピア学会に所属したことで、近隣の民族集団の研究者と出会うことができ、ナイル・エチオピア研究の先輩方の研究内容や研究姿勢から着想を得たものです。この度の受賞にくわえ、次の研究に対するヒントを与えてくださったことに対しても、皆様に改めて感謝申し上げます。今後も皆様の研究から刺激を受け、自身の研究を発展させていけたらと思います。



エチオピア国境近くのタウン、ナーシルのングンデン教会のメンバーと

第 25 回高島賞選考結果 講評

■受賞対象著書

橋本栄莉『エ・クウォス——南スーダン・ヌエル社会における予言と受難の民族誌』
九州大学出版会、2018 年



本書の主題は、19 世紀半ば以降、現在に至るまで「数々の社会変動や政治動乱を生き抜いてきたヌエルの人びとが『クウォスである』と語る出来事と、100 年以上前になされた予言を通して、彼ら自身が位置づけていく経験のありよう」（「はじめに」、p.i）である。

言うまでもなく、ヌエルは、イギリスの社会人類学者エヴァンズ＝プリチャードの著作を通じて知られるようになった、現在の南スーダン共和国およびエチオピアに居住する人びとである。本書は、2008 年から 2013 年にかけて、著者が南スーダン（2011 年 7 月の独立までは南部スーダン）の各地で実施したフィールドワークに基づいている。調査地には、南スーダンのなかでも辺境や奥地と言ってよい地域が含まれている。そうした、政情が不安定で交通・通信の状態も劣悪な地域で、対象の人びとと親密な関係を構築しつつ、長期のフィールドワークを遂行したこと自体が、本書の学問的評価とは直接関係はないとしても、評価に値する。さて、調査の過程で著者は、「エ・クウォス」（それはクウォスである）という表現をたびたび耳にした。クウォスは、英語では Divinity, divinity, Spirit, spirit 等、日本語では神、カミ、霊等と訳されている概念である。身の回りの日常的な出来事から、国レベル、さらに国際的、グローバルなレベルの出来事までの説明原理として、この表現は、会話のなかでひんぱんに用いられる。そして、この説明原理と深くかかわっているのが、クウォスにその特別な能力の源泉がある「予言者」の言行だ。予言者は多数おり、現在も出現し続けているが、とりわけ重要なのが、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて実在したングンデンである。

1983 年から 22 年間続いた第二次スーダン内戦のなかで、ヌエルの人びとが内戦の当事者となり、被害者としてだけでなく加害者としても、苦難の経験を重ねるなかで、そして 2005 年以降、内戦終結後のあらたな政治状況のなかで、ングンデンの予言は、現状を説明する原理として、そして未来の指針として、繰り返し引用されることになる。興味深く、かつやっかいなことは、ングンデンの予言には、旧約聖書における預言のような文字化された「定本」が存在しないことである。予言は、主として歌のかたちで伝承されており、多数のヴァージョンがあり、おそらく現在進行形で変化しており、その全体像を明らかにするのは困難である。そもそも、若者たちにとって、こうした歌は難解であり、一義的な意味を指摘することはできない。

現在の南スーダンでは、ングンデンの歌や彼に関する画像は、インターネットや携帯電話によって流通、拡散している。その結果、読み書きができない人たちも、こうした情報にアクセスできるようになっている。本書では、こうした状況が詳細に記述・分析されており（とくに第 4 章）、メディア論としても読みごたえのあるものになっている。

本書は、著者がフィールドワークの初期から経験し、そして疑問に思ったことを解明しようとした知的営為の結晶であると言える。つまり、「エ・クウォス」という常套文句と予言への言及という現象を理解可能なもの

にしたいという目的は、終始一貫している。この目的を実現するため、著者は19世紀後半まで歴史を遡り、関連する文献を渉猟するとともに、多産や不妊といった人間の再生産にかかわる出来事に注目し、さらに南スーダンという新国家の誕生へと視点を移動させる。

ヌエルの人びとは、南スーダンの独立という歴史的な出来事を、まさにングンデンの予言の成就として経験したのであった。その状況は、複雑で錯綜しており、副大統領であったヌエル人のリヤク・マチャールも自身の利益のために利用しようとした。著者自身も当事者として巻き込まれることになる。こうした経緯が本書では生き生きと説得的に描かれている（第5章）。

本書の理論的な枠組みは、以下のようにまとめることができる。まず、アフリカの諸社会に関する宗教人類学や歴史人類学の研究成果を批判的に継承しつつ、主としてT.O.バイデルマンの、「接合・相互作用的なモラル・コミュニティ論」に依拠することが表明される（序章）。そして、クウォスと予言をめぐる問題系が、ヌエル自身にとっても、著者自身にとっても、他者や新しい状況に対する想像力を養い、「存在の他の様式」に対する気づきの機会を提供しているのだと結論づける（第7章、終章）。

橋本栄莉の『エ・クウォス』は、著者自身が長期のフィールドワークの過程で収集した豊かで綿密な民族誌的データと、文献研究の成果が見事に結合した、優れた人類学的成果であるといえる。それは、いまだに新国家の形成途上にある南スーダンだけでなく、北東・東アフリカの諸社会の歴史的動態を理解し、今後を展望するうえで有益な研究でもある。

ただし、本書には若干の不十分点が認められる。まず、タイトルにもなっている「クウォス」自体に関する議論がほとんどないことは、問題である。索引にもクウォスという項目がない。索引の「神性」の項目には、「→クウォス、デン、ブックも参照」と書かれているにもかかわらず、クウォスが抜け落ちている。クウォスについては、「はじめに」の冒頭で、「(この)語は少々やっかいで、場面によって『神』や『霊』や『精霊』などと訳すと、わたしたちにとって理解しやすくなるかもしれない」と述べているだけで、全編を通じて「少々やっかい」な状態にとどまっている。この問題が十分に展開されていたなら、エヴァンズ＝プリチャードからゴドフリー・リーンハートに至るナイル系諸社会に関する宗教人類学の豊かな伝統に、新たな貢献ができたものと考えられるので、残念である。また、牧畜に対する関心が希薄であるため、供犠獣の選択——性別、成長段階、色彩——に関する意味付けの議論が欠落している。さらに、本書で明らかにされた「存在の他の様式」に対する気づきという観点の、より広い文脈における適用可能性についての考察も欲しかったところだ。

こうした不十分点にもかかわらず、本書は、文化／社会人類学にとって、および南スーダンのみならず、北東・東アフリカに関する地域研究にとって、顕著で重要な貢献をなすものとして高く評価できる。

以上の理由から、本書は2019年度の高島賞授与にふさわしい業績であると判断するしだいである。

2019年3月22日
日本ナイル・エチオピア学会
2019年度高島賞選考委員会
栗本英世（委員長）
内藤直樹（委員）
村橋 勲（委員）

Tera Askebari, Informal Leaders or Formal Servants?: Minibus Conductors under the Formalizing Policy in Addis Ababa

Choi Eunji
Kyoto University



People lining at the Megenagna terminal which is conducted by *tera askebari*.

One of the days in April 2019, when the pink and white cherry blossoms in Kyoto have bloomed splendidly, I could have a first chance to present my research at JANES annual conference. It was a great pleasure to share my research interest with JANES members, just two weeks after I started my Ph.D program at Kyoto. At the conference, I introduced *Tera askebari*, the terminal conductors and queue keepers in Addis Ababa, Ethiopia. In the first half-year of 2014, I got a chance to study at Addis Ababa University as an exchange student. It was my first time to visit Ethiopia. I studied Amharic and Ethiopian history at that time. Like most of the exchanging students who study abroad, I had a lack of money in my pocket. I should use one of the cheapest modes of transportation, a minibus locally called Taxi. One day, in the very midst of the journey, the people who were wearing florescence jacket quarreling with the minibus operators caught my eyes in a moment. I asked my *Hebasha* (refers to Ethiopians locally) friend who they are. She simply replied, “they are *tera askebari*”. After that, I started looking deep into their activities whenever I got a chance to pass by the Aratkilo terminals near my school. I found out that they are not only queuing the passengers but also controlling the minibuses by their own rules. When I asked them a question, they told me that they registered in government just a few months ago. As I was interested in the informal sector business and its formalizing policies, I decided to research this issue when I joined the Master’s course in the previous university.

The presentation at JANES was based on my Master’s thesis. I introduced *tera askebari* and tried to explain the government policy’s effect on their business. Formalizing the Micro and Small-sized Enterprises (MSEs or SMEs) has been taking its spotlight for alleviating the poverty level of the informal workers in many African countries (1). Addis Ababa city administration was not an exception, as they inaugurated Addis Ababa Micro and Small Enterprises Bureau (AAMSEDB) in 2011 ward-level to carry out various formalizing policies. *Tera askebari* who were mostly *gulbetennya* (refers to a person who is physically strong in Amharic slang), collected the money from minibus operators without any permission from the government. In this context, they were also a target for the AAMSEDB due to their informality as they did not pay taxes. As a result, they needed to register and get a legal license to operate the business whether the transferring process was voluntary or not.

However, the government’s ambition to keep a tight reign on them seems not very successful. According to my research, I found out various informal actions of *tera askebari* even though they have been

signed into the representative MSEs organization of the city. Most of them were sticking into their own way of behavior as there was a lack of institutionalized regulations on managing the business. First, it is found out that the *sadi* (the fare which *tera askebari* collect by each minibus in Amharic slang), shows the varieties. Some *tera askebari* collect one birr (Ethiopian currency) by each minibus (at Kotebe terminal) while some collect five birr per minibus (at Kazanchis terminal). In 2019, the *sadi* has increased enormously as most of the terminal collects five to ten birr. Also, the fifty-birr *sadi* was existing at Megenagna terminal. I also found out that the *tera askebari* are accepting illegal activities as the law was not existing to control them. They allowed minibus operators to accept more passengers than the regulation mentioned. Also, hiring substitutes were often found.



Congestion between people in Megenagna terminal. *Tera askebari* need to resolve the congestion well when passengers gathered with rush.

These informal activities are attributed to various reasons. First, there was the absence of unified policy on controlling the thousands of *tera askebari* in the city. *Tera askebari* have been formalized by MSEs institution but the intervention by the transport authority was comparatively weak. Second, they did not get any training on basic skills such as controlling the vehicles, queuing the passengers, and acting professionally. This brought them to adhere to their own standards on managing the transport. Lastly, the government did not impose the compulsory amount that they need to save on their MSEs program, which caused them to abuse the system since they could prolong their power on the terminal in the name of “registered organization” and freely hire youngsters as substitutes. Therefore, the question of the formalizing the *tera askebari* lost direction and remained ambiguous. In my presentation, I reached the conclusion that the process of formalizing informal sectors needs a careful approach in the case of *tera askebari*.

Since I mainly focused on policy assessment to *tera askebari* in my previous research, for the coming Ph.D theme, I am more focusing on their activities in the terminal to understand their role under the urban traffic system. As most of the *tera askebari* are controlling the paratransit vehicles by their own rule, I want to deeply observe which criteria they use on controlling the vehicles. I just brought the new data from the field a few months ago and I cannot wait to discuss with the members in an upcoming conference!

Reference

(1) Aga, G., Francis, D. C., & Meza, J. R. (2015). *SMEs, Age, and Jobs: A Review of the Literature, Metrics, and Evidence*. Policy Research Working Paper 7493, World Bank Group.

フィールド通信

森と市場のはざままで

小林淳平（京都大学）



（写真1）

私はタンザニアの海岸から50キロほど内陸に入った東ウサンバラ山塊（以下、アマニ地域）で農村調査をしている。タンザニアは国土の大部分をサバンナや乾燥疎開林が占める半乾燥地であるが、私が調査しているアマニ山塊はインド洋から吹き付ける季節風の影響で年間を通じて雨が降り、山肌は鬱蒼とした密林で覆われている。地域住民のほとんどは農業で生計を立てているが、農地は痩せて生産性が低く、近隣の森に棲むサルやヒヒによる食害が絶えないこともあって、農業による食料自給は難しい。とくにタンパク源となる肉・魚・マメはすべて購入していて、現金収入がなければこの地域の生活は成り立たない。

不足した食料を補うため、農民たちは地形や気象のわずかな変化に応じて多様な換金作物を育てている。標高が高くなるにつれて、カカオからコショウ・カルダモン・シナモン・チョウジ・チャへと変化させていく。こうした香辛料や嗜好品用の作物の周りには、バナナやキャッサバ、ココヤムなどの根栽類、マンゴーなどの果樹が雑然と植えられている。地域特性を示すために畑の構造を調査してみたが、雑多な植物がランダムに植えられている畑の特徴をつかむのは容易でなかった。畑によって植えられている植物の構成、樹齢、配置、立体構造がまるで違う。住民はそれを「混ぜこぜの畑 (*shamba la mchanganyiko*)」と呼ぶが、この状態は多種多様な有用植物が渾然一体となった、意図的につくりだされた畑であった（写真1）。

標高が低い私の調査村で主に栽培される香辛料はコショウとカルダモンである。カルダモンは古くから栽培されてきたが、コショウは最近の市場価格の高騰をうけて盛んに植えられるようになった。ただ、コショウの値段がよいからといって畑の全面にコショウを植えるようなことはせず、あいかわらずさまざまな作物が混ざった状態を維持していた。市場価格が変動することを経験的に知っているのだろう。畑を調査していくと、木に巻きついていたバニラが1株、放置されたカカオが1本、枯れたシナモンなど、彼らが試行錯誤してきた痕跡を見つけることができる。彼らは市場の動きや外来植物の環境特性を探りながら収入源を模索してきたのであろう。

収入源は植物にかぎらない。Roe[2002]は、アマニ地域の住民が珍種のカメレオンやヘビ、カエル、ヤスデなどを森からとってきて販売していたと報告している。私が調査を始めた2018年には森林性動物の捕獲の取り締まりが厳しくなって、珍獣販売は見られなかった。その代わりに、蝶を養殖して蛹（さなぎ）を販売することは認められるようになっていた。畑の隅の小さな藪を覆うように蚊帳が吊され、そこが蝶の養殖場になっていた。この地域にはいろいろな蝶が息息して、なかには珍しい種類もいるのだろう。蝶を捕まえてきて蚊帳のなかに放つと、枝葉に卵を産み付ける。孵化した幼虫は木の葉を食べて成長し、蛹になると業者に売ののだという。どの蝶がどの木の葉を食べるのか知らないといけない芸当である。

ある日、村の小径を歩いていると藪のなかから突然村人が飛び出してきた。声をかけた私には目もくれず、彼は蝶めがけて一目散に走り去って行った。手には虫取り網をもち、肩から虫かごを下げている姿はさながら日本の虫取り少年だったが、彼には生活がかかっていたのだ。熟練の技のうえに成り立っていた蝶の養殖も、翌2019年にはあえなく禁止されてしまった。蝶を追っていた男性は、収入源を失ったことについて「別にどうってことはないよ。政府が許可したらまた始めればいいさ」とあっさり語った（写真2）。



（写真2）

アマニ山塊は大都市タンガの後背地である。この地域の住民は、豊かな森の恵みと市場経済の恩恵を受け、それらに強く依存しながら生きてきたのである。しかしそれはけっして楽な生き方ではない。政策や市場の変化に振り回され、そのたびに新しい状況へいち早く順応しなければならないのである。変動する状況に対応できる柔軟性は、多様な生態や収入源から生みだされている。彼らは市場の不安定性を経験的によく知っていて、収入源を特定の作物に特化させるようなことはしない。森と市場のはざままで生きるには、フットワークの軽さが何よりも大切なのである。「混ぜこぜ畑」に残された換金作物の痕跡や畑の片隅にぶら下がる蚊帳は、彼らの柔軟な生き方を物語っているのである。

Roe, D. 2002. *Making a killing or making a living: wildlife trade, trade controls, and rural livelihoods*. London: IIED.

新刊紹介

『ケニアのストリート言語、シェン語：
若者言葉から国民統合の言語へ』

(小馬 徹、2019年、御茶の水書房)



「言語変化の過程は直接に観察されたことはない」——20世紀の言語学者L.ブルームフィールドはこう述べた。だが21世紀の私たちは、新たな言語表現や変異形がどう生まれ、どう広まるのか、観察する方法を得られつつある。

1963年に独立したケニアは、国家語をスワヒリ語、公用語を英語と定めた。だが首都ナイロビに住み着いた人々の間に、スワヒリ語を母体としつつ、様々な民族語を組み込んだ混合共通語——シェン語が生まれた。シェン語はやがて「都会の言葉」として、学生寄宿舍の共通語となり、若者文化を象徴するものとなった。そこに目をつけた企業や政党がシェン語でキャンペーンを繰り広げ、様々な社会現象を巻き起こすことになる。

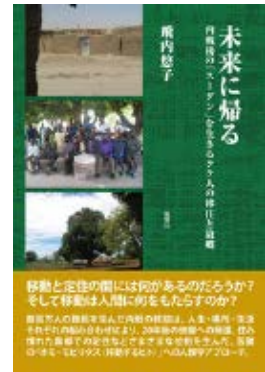
多作な人類学者として知られる本書の著者は、早くからシェン語の可能性に言及してきた。ケニアの人々には英語もスワヒリ語も外国の言語でしかない。だからこそ、シェン語は「ケニア人の内面をどの言語よりも自在に表現できる言語」(182頁)として受容され、今なお「盛んに形成中の言語」(17頁)である。著者はそこに、国民教育・国語政策とは異なる、草の根レベルでの国民統合・国民文学の可能性を見る。ケニアの人々はシェン語を「ストリート言語」(スワヒリ語 *lugha ya mtaa*) と呼ぶ。

仄聞するところによれば、著者は若手の言語学者らと共にシェン語研究の裾野を広げているという。同時に、著者自身が発表したシェン語に関する論文の中から5篇(および書き下ろし1篇)をまとめたのが本書である。本書はシェン語の体系的・抽象的な分析を目指すものではなく、シェン語を通してケニアの社会と文化を分析し、さらに個々人の内的現実にも達しようと試みる。

そうした本書の性格上、各章に内容の重複や用語の不統一が散見される。だが、これらにかえって、各論文の発表当時のケニアの状況と著者の関心の所在を映し出しているように思われる。その点で、本書は刻一刻と変化するケニア社会のリアルタイムの記録でもある。

高橋 洋成 (東京外国語大学)

『未来に帰る：
内戦後の「スーダン」を生きるクク人の移住と故郷』
(飛内 悠子、2019年、風響社)



人がどこかへ「帰る」というとき、まず思い浮かべるのは見慣れた景色や人であろう。まだ見ぬ「未来に帰る」とはどのような体験か、本書のタイトルは読み手の興味をかきたてるに違いない。

本書は、スーダンの首都ハルツームや南スーダンの首都ジュバやカジョケジ、そしてウガンダ北部で著者が2007年から行なったククの人びとについての現地調査がもとになっている。クク人の主たる居住地は、ウガンダ北部と国境を接する南スーダン南部のカジョケジであり、東ナイロート系のバリ語に分類されるクク語を話す。農耕と牧畜を営むほか、国内外の各分野で活躍する人も多くいる (pp.39-55)。

序章と終章のあいだに6つの章が二部（第一部：1～3章、第二部：4～6章）に分かれて配置されており、以下ではその各章を概説する。

序章には、移動と移民に関する先行研究、帰郷と場所をめぐる考察が記される。

第1章では、カジョケジ地域の歴史とククの人びとの概要を述べたあと、彼らがカジョケジを故郷として認識するようになった経緯を、特に第一次スーダン内戦を契機としたウガンダへの避難、および1972年の内戦終結後に増加したというジュバへの移動などに関する具体例をもとに記述している。

第2章では、ハルツームの移住者居住地区を舞台に、著者の同居家族をはじめ、多くのクク人の移動の実態を描くことをとおして、彼らにとってのハルツーム生活の意味が論じられる。第3章では、第二次スーダン内戦の終結（2005年）後もクク人のスーダン南部への帰還があまり進まなかったにもかかわらず、2011年に実施された南スーダン独立をめぐる住民投票の前に行われた帰還事業をきっかけとして、帰還が大きく促進されたことに着目し、その実態が描かれている。

第4章では、ジュバへ戻った人びとのその後の生活、第5章ではカジョケジへ帰郷した人びとの葛藤などが取り上げられている。そして第6章では、再びハルツームの移住者居住地区へ戻った著者がそこで目にした変容ぶりが描かれ、ハルツームに残ることを選択した人びとの日常が詳述される。そして終章では、ククの人びとにとって「未来に帰る」ことの意味が紐解かれる。

本文の随所に挿入された著者と現地の人びととの会話からは、フィールドで交わされるいきいきとしたやりとりが垣間見えるだろう。望郷の思いは人それぞれであり、また、ある人がひとつの場所に対して抱く思いも時を経て変化することを、本書は鮮やかに描き出している。

山崎 暢子 (京都大学)

■ケニア

※ 2020年1月26日時点の情報です。

2019年1月15日、ナイロビ所在の高級ホテル「Dusit D2」等からなる複合施設が襲撃され、外国人を含む21人が死亡するテロ事件が発生しました。イスラム過激派組織アル・シャバーブによる犯行とされ、厳重な警戒態勢が敷かれたものの、2020年1月現在でも、依然として、ナイロビ市内でテロ未遂の容疑者が逮捕されるなど、注意が必要な状況です。日本にいる時点から、外務省の「たびレジ」から大使館発出の治安情報を受け取っておいたり、現地メディアのニュースをオンラインで閲覧しておくなど、現地からの情報に継続的に触れておくことをお勧めします。

ケニアの一次入国ビザは、入国前にオンラインから取得でき、入国時にパスポートに加筆がなされます。本来、一次入国ビザは3ヵ月間有効ですが、2019年以降、入国時に1ヵ月間しか有効期間が与えられない事例が頻発しています。1ヵ月間以上滞在する予定の方は、入国審査時に3ヵ月間の滞在が必要である旨を強く主張するほか、ビザが有効である1ヵ月間のあいだに、ケニアの主要都市の入国管理局でビザを書き直す（3ヵ月間を取得する）手続きをするとよいでしょう。最初のビザの有効期限が切れた後、さらに3ヵ月間の延長手続きをする際には、特に問題なく手続きがおこなわれているようです。

ケニアの調査許可は、NACOSTI（ケニア国家科学技術イノベーション委員会）のオンラインシステムを通じて取得できます。近年、受入機関からのレター取得にかなりの時間がかかるケースが多発しているため、事前にケニア側の受入研究者と密にコミュニケーションを取ることが重要です。NACOSTIのオンラインシステムも、幾度かの改変を経ているためか、申請や調査許可の受取りがうまくいかない事例も散見されています。十分な期間を設けて余裕を持った申請をお勧めします。調査内容によっては、KWS（ケニア野生生物公社）、KFS（ケニア森林公社）などからの調査許可も必要になりますが、その場合にもやはり、受入研究者との密な連携が重要となるでしょう。

外務省：テロ・誘拐情勢（ケニア） https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pcterror_100.html

稲角暢（日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・副センター長）

▶編集後記

2019年度中の配信となるところを、予定よりも遅れてしまいましたこととお詫び申し上げます。新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、学会としてもこれまでにない臨時対応を迫られている状況にありますが、みなさまのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。ニュースレターの速報性を活かし、次号ではオンラインシステムを用いた学術大会の運営や新型コロナウイルス感染症に関わる現地情報について発信できればと考えております。会員のみなさまには情報共有にご協力のほど改めてよろしくお願い申し上げます。（有井晴香）

JANES ニュースレター No.27-2

2020年4月17日配信

編集・配信

日本ナイル・エチオピア学会

編集委員

有井晴香 中澤芽衣 中村香子 松波康男